
仮面ライダーウインド

hori

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーウィンド

【Nコード】

N0929V

【作者名】

hori

【あらすじ】

仮面ライダーウィンドそれは風を持つ仮面ライダー・・・そして仮面ライダーウィンドへと変身する少年の日常は彼が偶然、手に入れたウィンドの変身ベルト<リングドライバー>と謎の怪人達によって少しずつ壊れていってしまう・・・ウィンドはこの世界をそして仲間や大切な人達を守るのか。

少年は風の力を手に悪を打ち砕く！！！！！！

邪悪を蹴散らせ風の力！！

プロローグ

仮面ライダーウインドそれは風を持つ仮面ライダー・・・そして仮面ライダーウインドへと変身する少年の日常は彼が偶然、手に入れたウインドの変身ベルト<リングドライバー>と謎の怪人達によって少しずつ壊れていってしまう・・・ウインドはこの世界を、そして仲間や大切な人を守るのか・・・。

少年は風の力を手に悪を打ち砕く!!!!!!!!!!
邪悪を蹴散らせ風の力!!

ある隕石の中に一つのベルトがあった・・・。
するとベルトは一瞬だけ強く輝きだした・・・そして少したったあと輝きは消えた
そして隕石は人が存在する地球へ向かった。
もうすぐ戦士が誕生する・・・そうウインドが・・・。

プロローグ（後書き）

どうもはじめまして・・・小説は書くの初めてなので緊張しています。
文はダメダメですが少しでも読んで頂けると幸いです。

第1話（前書き）

第1話やっどスタート!!

主人公「ついに始まるんだな」

そうだな、でもそんなに長く書かないから、それじゃスタート。

第1話

第1話

もうあと数日で夏休みという中学校。

「ふあゝ寝みゝ。」

とあくびをしているのは「加藤木 歩」。

至って普通の中学校に通っている男子中学生である。

「もう．．しつかりしなさいよ．．歩。」

そして歩を軽く注意しているのは「火咲 逢」。

彼女は歩の幼馴染でしかも美少女である。

「うゝん？なんだよ逢？」

「もうそろそろお昼だよ。今日どこで食べる？」

「うゝん．．今日は気分転換に食堂じゃなくて屋上にしようかな。」

「分かった。じゃあ．．屋上に行きましょう。」

「ああ。」

二人は屋上へ向かった。

屋上

屋上についたふたりは近くにあるベンチでお昼をとっていた。

「やっぱ、火咲の弁当はうまいな。」

「ふふ．．．ありがと。」

歩は実は毎日．．逢に弁当をつくってもらっている。
周りの男子が聞いたら歩は速攻でばこられるだろう。

「オマエはいい奥さんになるな。」

「ふえ！？／＼」

逢は顔を赤らめる。

「どうしたんだ？」

「恥ずかしいこと言わないでよ。もう．．／＼」

歩は逢を不思議に思いつつ空を見上げた、すると何か光った物体が
落ちてくるのが見えた。

「逢．．あそこになんか見えないか？」

「あ．．ほんとだ、なんか落下してるよ。」

そして．．ドゴン！！という音を起こし物体は落下した。

「おい、落ちたぞ隕石みたいなやつ」

「すごい揺れたわね．．。」

二人は少し沈黙した後

「まあ．明日になったらなんか知らせがくるだろ。」
「そうね。」

と言った。

この歩たちが見た隕石がこの後．ウインドの誕生に大きく関わる事になる．．。

第1話（後書き）

やったー！！一話終わった。

歩「まったく、このあとどうなるんだか・・・。」

さあ次回で変身までもっていけるかな？

ダメな文ですが・・・よかつたらまた見てください。

逢「あたし・・・どうなるんだろ・・・。」

第2話（前書き）

第2話です。

歩「やつとだな」

今回で変身までもってかないと・・・。

歩「では第2話スタートです。」

歩・・・それ俺のセリフ・・・。

第2話

第2話

お昼を食べ終わった二人は教室へ戻って来た。

「???」おい．．歩。 お前どこに行つてたんだ？食堂にもいなかったし。」

と声をかけられた方を向くと三木 来牙がいた。

「ああ．．．今日はちよつと気分転換に屋上で食べてたんだ．．。
今．．歩と話しているのは三木 来牙で逢と同じ幼馴染で昔からの知り合いである。」

「て事は、火咲も一緒だったんだろ．．．。」

「ああ．．．。」

「気をつけるよお前。下手したら男子達に殺されるぞ。」

「まあ．．．そんなときはなんとかするよ。」

歩は来牙と別れて自分の席に戻る。

「もうすぐ授業始まるな。」

授業の始まりのチャイムが鳴った。

放課後

「歩。」

学校の授業が終わり歩は帰る準備をおわらせた所で・。

逢が話かけてきた。

「なんだ？」

「このあと用事ある？」

「いや特にないけど。」

「じゃあ・・・ちよつと買い物に付き合ってくれない?」

「おう。別にいいぞ。」

歩は後ろに殺気を感じた。

「でも・・・ちよつと先に行つてくれ。」

「え?なんで?」

「男子達の攻撃が襲ってくるから!!!!!!」

と言い歩は走り出した!!

「あ!ちよつとあゆ・・・。」

男子達「「「まああてええええ加藤木iiiiiiii!!!!!!」」」

男子たちはもの凄い勢いで歩を追いかけて行った。

「行つちやつた。」

逢は少し考え・・・。

「歩に言われたとおり先に行つてよ。」

その頃・・・歩は

男子達「加藤木！！貴様ああ！！自分だけ幸せになりおつてえええええ！！」

歩「はあ・・・はあ・・・俺が幸せって・・・意味がわかんね　よ　おお！！」

男子達の追手から逃げていた

歩は女子との関係とかには鈍感な奴らしい・・・。

この町には色々な店が集まった巨大なショッピングセンターがある
ほとんどの人達が買い物しにくるため今日もここは人が大量にいた・
・・・。

そして歩や逢もここに來ていた。

「で・・・今日・・・はここで・・・何を・・・買った？。」ボロツ

結局・・・男子たちから逃げられなかった歩はリンチされボロボロだった・・・。

「今日は料理に使う食材の買い物・・・というか大丈夫？」

「ああ・・・体はなんとか・・・てか普通に買い物なら俺・必要ないんじゃない？」

「歩・・・忘れてるの今日はアンタの家、瑞希さんいないんですよ。」

「え？あーそうだった今日は瑞希姉さんに逢の家に世話になってねって言われてた。」

「で・・・荷物は多いから手伝い係として。」

「そういう事が・・・。」

「うん。そういう事！」

「うんじゃ行くか。」

「うん。」

二人はショッピングセンターへ入って行った。

買い物が終わり二人はショッピングセンターから出てきた。

「はあーおわった」

「うん。」

二人が話して帰ろうとした時

キヤアアア

悲鳴が聞こえた

「な、何！？悲鳴？」

「なんだ？」

ドガンツ！！と中から爆発音が聞こえてくる

「逢・・・荷物頼む！！」

歩は走りだす。

「あ・・・歩　　！！」

ショッピングセンター

中に入ると彼の目の前には悲惨な光景が広がっていた。
証明が消え入口に近くには警備員がホールには定員や客が皆殺され
ていた。

皆斬られた跡や噛みつかれた跡があつた・・・。

「なんだよこれ？・・・なんなんだよ！！！！」

と叫んだ歩の目の前に何かが現れた。

「グガアアアア！！！」

皆を殺したと思われる怪人が現れてた。

「くそ！！」

すぐに走って逃げるが怪人はすぐに追いついた。

そして歩にみぞ打ちを入れる

「がはあ！？」

みぞ打ちを入れられた歩はそのまま壁に吹き飛ばされる。

「はあ・・・はあ・・・（このままじゃ殺される。何か対抗できる物を）」

歩はあたりを見回す・・・すると物置のような所を発見した。

「（あそこなら何かあるかもしれない・・・ついでに隠れられるし。）」

そのまま歩は物置へ飛び込んだ。

「グルガアアアア！！！！」

怪人は叫び標的をさがす。

「なにかないのか？！これは？」

歩は物置で対抗出来る物を探す・・・。

そこで歩はベルトとケースを見つけた・・・。

そして見つけた途端・・・怪人の攻撃が歩を襲った！！

「うわっ！！」

吹き飛ばされるがなんとかもちこたえた歩はベルトを巻くすると・・・。

リングがケースから飛び出しベルトに装填された。

すると歩の心に声が流れてくる

歩の心の中

「なんだここ？」

そこは何もない真っ白な空間だった。

???「ここは・・・お前の心の中よ。」

歩は声の聞こえた方をむくそこにはロープを被った歩と歳が同じく

らいの少女が立っていた．．．．。

歩「お前．．．だれだ？」

「？？？」話はあとよ。とにかくそのベルトで変身しなさい。」

歩「俺が変身？」

「？？？」そう。じゃないと大切な人守れないわよ。」

歩「．．．．．」

歩には逢の顔が浮かぶ自分の大切な人が．．．。

歩「わかった。変身してあの怪人をぶっ飛ばす!!」

「？？？」それでこそアユムよ。」

歩「お前なんで俺の名前を？」

「？？？」フフ．．．。」

少女は小さく笑った

そして元の場所にもどる。

目の前にはもう怪人が来ていた。

「行くぜ怪人!!」

と言い放ち歩は叫んだ

「変身!!」

そして歩が装填したリングを回すとベルトが叫ぶ!!

「リング・イン・ライダー ウインド!!!!!!」

ベルトから吹きだした風が歩の周りに集まりその風が消えると歩の姿はく仮面ライダーへと変わった。

この瞬間・・・ウインドは誕生した。

第2話（後書き）

はー終わった．．．。

歩「次回は戦闘だな。」

うん．．．そうだな．．．．．。

歩「なんでそんなに暗いんだ。」

戦闘は書くのが苦手なんだよ．．．。

歩「あーまあがんばれ」

うん。という事で第3話．．．

ダメな文ですがよかったら見てください。

追記

感想と悪い点を書いてくれた方ここでお礼を言わせて頂きます。

ありがとうございます！！！！！！

これからも頑張るのでよかったら読んでください。

第3話（前書き）

第3話です

今回は怪人と初戦闘です。少し短いかも。
ではスタート。

第3話

第3話

そしてウインドが誕生した。

「さあ・・・行くぞ!!!!」

「グルガアアアア!!」

怪人は叫びウインドへ襲いかかる。

「ガア!!」

手の爪が伸びる。そしてウインドへ斬りかかる。

「あぶねっ!!」

なんとか避けるウインド

「ゲガア。」

「今度はこっちの番だ。」

ウインドは怪人へパンチを放つ。

「タア!!」

「ゲガツ!!」

パンチを喰らった怪人が吹っ飛ぶ。

そしてドゴン!!と音を起こし壁へ直撃する。

「これ凄いな。」

歩は自分の手にした力に驚いている

「体も軽いし力も上がった。変身する前に喰らった傷は痛いが……
これならいける!!」

ウインドは走りそのまま怪人へとび蹴りを放つ。

「うおらあ!!」

だがウインドのとび蹴りは当たる瞬間怪人は消えた。

「何!？」

そして背後から消えた怪人の攻撃が放たれる。

ドガッ!!

「ぐあっ!!」

背後から攻撃を受けたウインドはすぐに態勢を整えようとするが。

ドガッ！！バギ！！ドガッ！！

「ぐああああああ！！」

怪人の高速でくる攻撃を喰らい吹き飛ばされホールの床に転がる。

「くそ！！なんだあの早さは！？」

「グガアアアア！！」

さらに怪人の高速移動が早くなる。

「また早くなつた！？なんなんだアイツ・・・」

立ちあがったウインドに怪人が攻撃を仕掛けようとする。

するとウインドのベルトについているケースからリングが飛び出してきた。

「なんだ！？」

そして変身する前に話した少女が声をかけてくる。

「アユムこのリングを使うのよ。」

歩「このリングは？」

「このリングはアユムが今戦っている怪人と同じように高速移動できるリングよ。」

歩「そうなのか。助かった。」

「あと他にもリングがあるから活用しなさい。」

歩「わかった」

「勝ちなさいよアユム。」

歩「ああ！・・・だからお前なんで俺の名前を？」

「あとでしっかり話しましょう。」

歩「あ・・・おい!!」

そして少女の声が消えすぐに怪人の攻撃がくる。

だがそれより先にウインドがリングを装填し回す。

「リング・イン・ソニック!!」

ベルトが叫ぶとウインドの動きが早くなり怪人の攻撃を避ける。

「いままでやられた分返させてもらっぞ。」

ドガッ!!!!!!

ウインドの拳が怪人を殴り飛ばした。

「ゲガアア。」

怪人はうめき声をあげる。

「まだだー!!」

さらにウインドは攻撃を怪人にいれる。

ドガッ!!バキ!!ドガッ!!

ウインドはパンチを連続を入れたあと

「てえやあああ!!」

そのまま怪人に回し蹴りをいれる。

「グガアアアア」

怪人はそのまま吹き飛ばされる。

「さあ・・・終わりにしてやる。」

ウインドはケースから金のリングを取り出した。

そのリングをベルトに装填し回す。

「リング・イン・ファイナルブレイク!!」
とベルトが叫ぶとウインドの周りに風が集まり

「はあっ!!」

ウインドがジャンプしキックの態勢になる。

するとウインドの周りにあつた風がキックする方の足に集まった。

「ウインドストライク!!」

そう叫びウインドは怪人へキックを放った。

「はああああああ!!!!!!」
ウインドの叫びとともに風が勢いを増しキックが怪人へ直撃する。

「グガアアアア!!!!」

ウインドストライクを受けた怪人は爆発した。

「はぁ・・・はぁ・・・倒した。」

歩は変身を解き元の姿へもどる。

「なんとかなっ たな。」

「???」「アユム。」

歩「え？ なっ！？」

声をかけられた方へ向くとそこにはあの心の中で出会った少女が目の前に立っていた・・・。

第3話（後書き）

なんとか戦いを終わらす事が出来ました。
えー次回は謎の少女の正体が分かります。

あと2話までやっていた座談会的なモノは面倒なので章が終わった時にだけやります。

追記

感想と悪い点をかいてくれた方ありがとうございます。
今後もこんな感じで進みますがどうぞみてください。

第4話（前書き）

投稿が遅れて本当にすみません。

第4話でこの章は終了です。

くだらだらしててなおかつダメな文ですがよかったですらみください。
それでは第4話スタート。

第4話

第4話

怪物との戦いに勝利した歩。

ベルトを外し変身を歩は後ろから名前を呼ばれる。

自分の名前を呼ばれ、見た先には心の中で出会った少女が立っていた。

「お前・・・一体何者なんだ？」

と歩が問うと少女は頭のローブをとって素顔を見せた。

「私は歩が持っているベルトに造られた力の塊よ。」

そう話した少女の姿はもの凄く綺麗だった。それを見た歩は一瞬思考が停止してしまった。

「・・・歩？」

少女が不思議そうな顔で見てくる。歩は思考が戻りあわてて返事をかえず。

「あ、ああ・・・そうなのか。どうして力の塊が実態化したんだ？」

「それはウインドの力が増幅したからよ。」

「力が？」

歩が聞くと少女はウインドの力について説明を始めた。

「そう。ウインドの力は歩の心力（心の力）によって力が上がるの。」

「てことはお前は俺の心力が上がってウインドの力が上がったから実態化したのか。」

「そついつ事よ」

「じゃあもし俺の心力が無くなったらどうなるんだ？」

「歩の心力がなくなるといふ事は歩が死ぬって事になるのよ。」

「心力はウインドの力の源みたいな物なのか。」

「みたいじゃなくて源よ。そして歩がもし死んでしまったら私もそのベルトも消えるわ。」

「俺が死んだらお前も消えるのか・・・。」

「そういうことね。」

「じゃあ、お前は俺が守るな。」

「ええ。ありがと歩。」（何かしらこの胸をつつかれるような感じは？）

「お前そついえば名前無いのか？」

「ええ。名前は無いわでもしいて言うなら風の化身ヴァ ュってと

「こかしら。」

「そうか・・・じゃあ俺はユアって呼ぶな。」

「ユア・・・。なんで？」

「それは、ヴァ ヌよりもユアの方が名前の一部で呼びやすいし可愛いと思ったからかな。」

「え！？」「ドキッ！！」

ユアの頬が少し赤くなる。

「・・・ユア？」

歩は不思議そうに尋ねてくる

「え、ええ。わかったわ歩。」（さっきからなんなのかしらこの感情は？）

ユアは自分に初めて芽生えた感情に戸惑っていた。

「あと聞きたいんだが。」

「・・・・・・・・・・」

ユアは自分の感情についての疑問が解けず考えこんでいるようだ。

「おい・・・・・・・・ユア？」

「あ、歩・・・な、なにかしら？」

「ここにいた人たちを襲った怪物は何なんだ。」

「あいつらは次元怪人。名前のとうりに次元によって作られた怪人よ。」

「次元ってなんで次元から怪人が出てくるんだ？」

「それは人間の負のエネルギーが次元に取り込まれて形となって人を襲うのよ。」

「負のエネルギーで怪人ができるってそんなに怪人が出来たら世界が怪人だらけだぞ。」

「そうね。このままだとマズイわね。」

「あとさ。」

「？」

「次元怪人ってのは呼びにくいんだが。」

「それもそうね。もう一つのアイツらの名前はディメンションよ」

「ディメンションか・・・。」

「あと最後に質問なんだけど・・・。」

「ええ。」

「俺の名前を知っている理由を教えてください。」

「……………」

ユアは少し黙り……。。

「ここにずっといるのもマズイし場所を変えるわよ。」

といい、歩の手を掴んだ。

「ああ」

と歩が返事をする二人は風に包まれその場から消えた……

どっかのビルの屋上

風に包まれた歩とユアはどこかのビルの屋上にいた。

そしてユアが話を始める。

「それじゃ話しましょうか。あたしが歩を知っている理由を」

「ああ。」

「じゃあまず初めに歩はあたしの事を覚えてないの？」

「ああ。まったく。」

「じゃあ・・・2年前の事件は？」

「！！・・・お前なんでそのことを知ってるんだ。」

「私はあの場所で歩と出会ったの。」

「どうやって。」

「歩に瓦礫が降ってくる時に歩を助けたのは私よ。」

「でもお前は力が増幅しないと姿が出来ないんじゃない。」

「ええ。でもあの時ベルトは力が増幅したの。」

「なんで・・・？」

「それは、あの時、歩がベルトに選ばれたからよ。」

「俺があの時、ベルトに選ばれた？」

「そう。じゃあ話は終了ね。それじゃ。」

といいユアは風を起こし消えた。

「おい。話はまだ！！・・・。」

歩は叫ぶがもうユアの姿は無かった。

「ユア。」

歩は夕焼けの空を見上げて名前を呼ぶ……があることに気がついた。

「あ、ヤバ!!逢の奴置き去りにしちゃった。早く行かないと!」

と言い急いで逢の所へ向かう歩だった。

第1章その名はウインド E N D

第4話（後書き）

なんとか書き終わりました。次回はキャラの紹介です。
次回は物語ではないので早めに投稿出来るかと思えます。
ここからは座談会的な物であり好きでない人は飛ばしてください。

歩「ホントに初めていいのか？」

作者「うん。前の後書きでそう書いたし。」

逢「それじゃ始めましょ。」

歩・逢・作「第1章の座談会〜！！」

作「じゃあまず最初のゲストはヴァ　ユことユアです。」

ユア「どうも。」

歩「ユアなのか。」

逢「この人だれ？あたしたちと歳近そうだけど。」

歩「そっか。逢はまだユアと会ってないんだっただな。」

ユア「本編でもこんな感じになりそうね。」

作「それじゃまずこの1章について」

歩「変身した。」

逢「いつもの日常だった。」

ユア「歩とやつと会えた。」

作「もつとなんかないの！？」

歩「だってそんなんにお前文書いてないじゃん。」

作「すいません。」

逢・ユア「フォローのしようがないよ（わね）」

作「それじゃ次回はキャラ紹介で。」ノシ

登場人物（前書き）

ええ今回は人物紹介です。
ではスタート。

登場人物

人物紹介

加藤木 歩／仮面ライダーウインド

本作の主人公でウインドに変身する。

中学3年生、2年前のある事件で家族を失った。

その後、父方の妹（加藤木 瑞希）に引き取られた。

瑞希の事は義母さんとは呼ばず、瑞希姉さんと呼ぶ。

心が砕けかけた時に瑞希に助けてもらい、家族になってくれた瑞希が大好きになった。

仕事が多い瑞希のために家事や料理をするようになり現在は料理の腕が瑞希よりもいい。

勉強は中の下で運動は平均より上である。

そして逢と幼馴染である為、お昼を週に3回作ってもらっている。

だがその事で男子達ボコボコにされている（妬み、嫉妬などが原因）。

面倒見が意外とあり、男女問わず友達も多いが少しネガティブである。

人に何か頼まれると断れないタイプ。

仮面ライダー ウインド

歩がリングドライバーを使って変身した姿。

姿は緑と白の姿をしている。

風の力が使い戦う。ほかにも力が使えるらしいがまだ詳しくわかつ

ていない

パンチ力5t キック力10t

歩の心力によって力が変化する

必殺技は ウィンドストライク

風を巻き起こし右足に集中させ相手にぶつける。

火咲 逢

本作のヒロインの一人。

歩の幼馴染であり歩の面倒をよく瑞希に任される。

しっかり者でなおかつ美少女であり誰にでも裏表のない感情で接するため

友達も多く男子達の憧れの的。

歩には昔から好意を持っているが告白はいまだにしていない。

ユア (風の化身ヴァ ユ)

本作のヒロインの一人でベルトによって造られた存在。

歩の過去に深く関わる人物でありその時の事故で歩を助けている。

ウィンドの力の大きさによって自分も風の力が使えるようになる。

歩にユアという名前をつけてもらい彼と過ごして行くことで自分でも分からない

感情が芽生え始める。

三木 来牙

歩のクラスメイトで昔からの幼馴染。

なにかと事件が起こると歩に協力する。

ケンカが強くクラスの男子達を一掃できる力を持つ。

ある事件で歩とは違うベルトを手にする。

クラスの男子達

歩が逢と仲良くしていると殺す覚悟で襲ってくる歩のクラスメイト達。

来牙は含まれていない。

加藤木 瑞希

歩の父親の妹で歩の義理の母。

2年前の事故で家族を失った歩を引き取り面倒を見ている。

歳は22歳である歩が事故で心が砕けかけていた時に励まし歩に

自分が代わりにあなたの家族になると言い歩を助けた。

そして歩のよき理解者である。

ディメンション（次元怪人）

ウインドが戦う怪人。

人の負のエネルギーを別の次元から降って来た隕石が吸収して生み出された存在。

人間の心力を食べ強くなる。

登場人物（後書き）

こんな感じですがどうでしょうか？

この紹介は物語が進むにつれ変化していきます。

書き終わって気づきましたがネタバレが少しあります。

次回は章が変わり夏休み編です。

更新は少し遅くなるかも知れませんがよかったですらまた見てください。
では次回 夏休み編で。

第5話（前書き）

予定していた夏休み編
では、第二章の始まりです。
グダグダですが、どうぞ。

第5話

歩の部屋

ジリリリリリリ！と時計が頭突くような音を鳴している。

「・・・う、朝か。」

時計を止め歩は目を覚ました。

「・・・ねむ。」

歩が変身してディメンションと戦った日から数日たった7月26日。時間は午前の6時過ぎ、机に置いてある携帯がメールの受信音を鳴らす。

「朝早くから・・・だからだ？」

といい歩は携帯取りを開いた、メールは三木からだった。

「来牙？なんの用事だ？」

そのままメールの本文を見ると。

件名 今日暇だろ？

本文

せっかくの夏休みなんだから
海に行こうぜ！

三木からの誘いのメールだった。

「はあゝ疲れそうだけど行くか。」

といい返信のメールを送ったあとそのまま携帯を閉じて自分の部屋を出た。

そして・・・この海へ遊びに行く事から

加藤木 歩の中学生として最後で最悪の夏休みが始まる・・・。

仮面ライダーウインド

第二章 最後で最悪の夏休み編

リビング

部屋を出た歩はすぐにテーブルに置いてあるメモを見つけた。

メモには「朝ごはんしっかり食べてね。今日は早めに帰るから。」と書いてあった。

「瑞希姉さん今日も仕事早かったんだな。」

とテーブルに置いてあるメモをみた歩は朝食の準備をした。

・ ・ ・ ・ ・

朝食を作り食べ終わった歩は食器を洗い片づけ

「来牙の奴に何時か聞かないとな。」

といい三木にメールを送った。

・

少し経つと三木からメールが届いた。

件名 時間を教えるぞ。

本文

10時半に現地集合。

場所は、分かるよな？

あと他にも声かけたらメンバー
増えたから。

「つつたく、メンバー増えたならそいつらがだれなのか位教えるよ。」

といい携帯を閉じた歩は一旦自分の部屋に戻り必要な物を準備し始めた。

「えーと、海に行くんだから海パンと、財布くらいでいいか。」

そして準備を終えた歩はある人物に声をかけられた。

「歩、数日ぶりね。」

そこにはこの数日間、姿を見せなかったユア立っていた。

「なっ！？ ユア！？ お前この数日間どこに行ってたんだよ！！」

「しょうがないじゃない。ウインドの力がまだ不完全で存在の力が不安定なんだから」

「力が不安定って前に話してた俺の心力とかいうやつなの？」

「そうよ、この数日間ディメンションが出現しないで、ウインドの力が上がらないから」

今のウインドの力だとあたしはこの世界に2〜3時間しか居られないのよ。」

「そうだったのか、いきなり怒鳴って悪かったな。」

「いや、別に気にしていないわ。」

「そうか……。」

歩は少し間をあけて。

「ユア。俺、これから海に行くんだけど一緒に行かないか？」

とユアに提案した。

「海？ いいけど私と二人で行くの？」

「いや、他にもメンバーはいるけど？」

「あ、そう。」

ユアは少し残念と思っていたが、歩は全く気づかなかった。

それから二人は雑談した。

歩は時計を見る、時間は午前の8時半過ぎ、

「じゃ、そろそろ行くか。」

「そうね。」

ユアが返事をした途端彼女の頭に小さな頭痛がはしった。

「クッ、」

と態勢を崩したユアを見た歩はユアの体を支える。

「だ、大丈夫か!？」

「ええ。」

ユアをソファによりかかせた歩はユアに質問した。

「いったい、どうしたんだ？」

「ヤツらが出現したのよ。」

「ヤツら？・・・まさか！？」

「そう・・・ディメンションよ。」

「で、場所は分かるのか？」

「ええ・・・場所は歩が約束してたあの海よ。」

それを聞いた歩は驚愕の顔をした。

「な、それじゃ、来牙に危険が！！！」

「そうね、早く海へ向かうわよ。」

「ああ、言われなくても！！！」

と二人は家を出て海へ向かった。

第5話（後書き）

はい、という事で次回は戦闘です。

数日ぶりの戦いで歩がピンチに、という感じにしようと思っ
ていますが予定が変わる場合もあります。

あんまり長く書けない事に気づいたのでこれから、短くてもいいか
らとりあえずはやめに更新する事を頑張ります。
それでは。

第6話（前書き）

はい、6話です

やっぱり戦闘は書くのが難しいです
でございぞ。

第6話

第6話

海の海岸

デイメンションが来牙と約束していた海へ向かった歩たちは・・・

「はぁ・・・はぁ・・・ここが約束してた海だけど。」

「ええ・・・ここにヤツら力を感じるわ。」

だが来牙たちの姿はなく海にはまだ人はいなかった。

「よかった。でもまだここに来ている人はいないみたいだ。」

「そうね。」

歩が安心してしていると空がバキバキッ！！という音を鳴らしヒビが入ったようになった。

「な・・・空が。」

うそだろ、と歩の顔が青ざめる。

「歩！！ 前と戦ったのとは桁違いの力よ。下がって！！」

ユアが歩をひっぱり距離をとる。

そして空のヒビがさらに巨大になり

ガラスが割れたようにバリッ！！と音を鳴らし出現したあと地面と海が大きく揺れた。

歩とユアは出現したディメンションを見る。

その姿は歩が数日前に戦ったのとは比べ物にならない大きさと獣のような姿をしていた。

「なんだよ、あのデカさは!？」

「歩!!来るわよ!!」

ユアがベルトを取り出し歩に渡す。

大型ディメンションは ガアアアアアア!!

と咆哮をあげ歩たちのいる場所へもの凄い早さで向かってくる。

その頭の先には二本の鋭い角があった。

そのまま大型ディメンションは歩たちのいる場所へ突撃した。

「変身!!」

「リング・イン・ライダー・ウインド」

ベルトを受け取った歩はドライバーにリングを装填しウインドへ変身した。

「歩!!」

とユアがウインドに向かってリングを投げる。

「これは？」

「ウインドの力が増えたから新しいリングが出現したらしいの。その二つをうまく使って!!」

受け取った手にはリングが二つあった。しかもリングを装填するスロットが右手と腰に一つずつ増えていた。

そしてウインドはギリギリの所で大型ディメンションの突進を避けユアから受け取ったリングを右手に装填する。

「ウェポンリング・イン・ウインドブレード」

ベルトが声を発すると右手が風がに包まれ、剣が出現した。

「さあ、行くぞデカいの!!」

出現した剣<ウィンドブレード>を掴みそのまま巨大デメーションの後ろ足へ斬りかかった。

「ハアアアアア!!」

振り下ろしたウィンドブレードはそのまま足に当たるが弾かれる。

「クソッ!!」

「ガアアアアア!!」

デメーションの角から雷撃が放たれそのままウィンドへ遅いかかる。

だがウィンドはソニックのリングをドライバーに装填し

何とか避けたが・・・。

その隙にデメーションの前の足の爪が伸びウィンド斬り吹き飛ばした。

「ぐあー!!」

攻撃を喰らったウインドは数メートル吹き飛ばされる。

そして何度もバウンドしやっと止まった。

「ッ・・・痛、クソ!!」

転がったウインドは立ち上がりすぐにウインドブレードを構えようとするが

「って・・・剣がない!?!」

ウインドブレードは吹き飛ばされたときにウインドの右手から離れてしまっていた。

「ガアアアアア!!」

デイメンションは咆哮し2本の角を伸ばし、そのままウインドへ突進する

「くっ!!!(このままだとヤバイ!さっき貰ったもう一つのほうで

「！！」

ウィンドはさっき使ったのは別のリングを取り出しドライバーの腰のスロットへ装填した。

「グイークルリング・イン・マシンウインザア」

ベルトがそう発するとウィンドの目の前にバイク<マシンウインザア>が出現した。

「これは・・・ウィンドのバイクか。」

ウィンドはマシンウインザアに乗りなんとか大型ディメンションの突進を回避する。

すると、大型ディメンションは自分の出したスピードに耐えきれずそのまま転倒した。

そしてその隙にウィンドは吹き飛ばされたウィンドブレドを取りに向かう。

だが、突進を回避された大型ディメンションがすぐに態勢を立て直

しウィンドへ向かってきた。

「!!、このままだと追いつかれる!!」

ウィンドはウィンドブレードをなんとか取りそのまま方向転換しデ
イメンションへ向かった。

そのままバイクはスピードを出す。

「ここから反撃だ・・・デカいの!!」

そう叫んだウィンドは剣を構えバイクで大型デイメンションへ突っ
込んだ。

第6話（後書き）

はい、こんな感じです。

次回はウインドが新しい必殺技を出します。（ちなみに剣の）次は早めに投稿したいと思うのでよかったですら見てください。
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0929v/>

仮面ライダーウインド

2011年9月26日23時26分発行